

幕末における政治思想の一論稿

松井喜代司

(1)

今年「明治百年」を祝う歳であるといっている。「三姉妹」から「竜馬がゆく」というように明治百年のキャンペーンはテレビから週刊誌、果ては映画へと続演され1968年はあたかも明治ものに浮かされている。巷間での催しものは明治神宮奉賛会による明治維新百年記念祭（3月、武道館において）をはじめとして「竜馬がゆく」展¹⁾（高知県主催、5月、日本橋三越において）、「幕末の群像展」²⁾（読売新聞主催、5月、東武において）等々数えあげればキリがなく、社会報まですべて総動員してそのキャンペーンがすすめられており、本格的な記念行事は秋に入ってから一段と高まっていく模様である。その理由は明治と元号を改めた慶応4年9月8日から数えて丁度百年目にあたる日がこの10月23日であるからにほかならないという³⁾。ところがその反面、「このことは70年安保への前夜祭であって、思想的逆コースへの煽動的性格がある」といい「なんのために政府や財界がこれほど力をいれて宣伝しているのか」といって厳しく非難さえしている者がいるが、このことは遺憾に堪えないところである。こうした考え方をもっている人達は、おそらく明治維新の精神を真に理解することなしに、ただ単なる感情でものを判断している思想的偏見をもった徒輩であろう。また明治維新が果した国家的功業に対して、何等、感恩報謝の念をもっていない若い世代が多くいるのには、驚かされた。昨今の歴史教育が義務教育の場から高校・大学へと進級する過程において、いかに教師を通じて履習されてきたかを疑わざるをえない節もある。「明治は遠くなりけり」で

マス・ヒステリー状態に等しい感覚をもっている青年が、もし沢山いるとすれば、教育再考論を新たなる立場から打ち出さねばなるまい。

「明治百年祭」は一にも二にも実践しなければならないと主唱し、明治維新の先哲志士の志を体し、民族の伝統精神を復活昂揚せねばならないと力説鼓吹している右翼系の人々がいるが、徒らな皮相な行事の羅列にならないように願ってやまない。それでなくとも、お祭り騒ぎのお好きな日本人の在来性格は、その本質を極めることなく、ただ形式的な華やかな享楽主義的快感を味うことだけに専念するのが常である。筆者は学究の傍ら東京特別区の議員職をも兼務しているので、「明治百年祭」の催し事に関しての予算編成やらその執行面にあたってのクダらない組織団体を余りにも多く知っているがために警告をしておこう。次に心ある人々は「明治維新百年祭」という言葉がいつの間にか「明治百年祭」に塗り替えられ、最近では「東京百年祭」という呼び方に変ってきたことに対し、いささか首をかしげざるをえないであろう。どのようにして変わったかは知る由もないが、「明治維新百年祭」という言葉はことさらそうであるように「明治百年祭」という言葉も、つまるところ、それは王政復古——換言すれば、皇政思想の再現につながるものであるからとの思い過しから「東京百年祭」という言葉に改めた、としたら実にナンセンスなことである。また戦後20余年を過ぎた今日、いろいろな思想的な抵抗摩擦を懸念しての政治的配慮によって、「東京百年祭」と銘をうったとしたらもはや論外である。明治百年をめぐっての詮議だてはそのくらいにとどめるとしても、この言葉のニュアンスからくる歴史的ドラマは日本近代史をいろどる一大パノラマとってよいだろう。天皇親政への明治新政府成立のアンラーゲの役割を果たした民族主義的革命ともいべき幕末の政治思想、それは多種多様であるが、もう一度再評価して現代に取り戻してみてもよいではないか。筆者はこの意味において幕末の風雲急を告げる国家非常体制の最中であって、熱情溢れる多くの勤皇の志士たちや「日本の夜明け」に対して警鐘乱打の

松井喜代司

鞭を打ちながら東奔西走した先覚者達に夢をはせながら、この小稿をものしたのであるが幕末期における政治思想というテーマは余りにも膨大であり、またこれらに類似する書籍、文献等も無数にあって議論百出しているので一局部門のみに終止してしまつたことを許されたい。ともあれ枚数制限の関係からやむをえずとしても、今回は明治百年を記念する意味と併せて、本学の創刊号を祝福することに意義があるので、菲才浅学を顧みずに執筆した次第である。

(2)

見方にもよろうが、明治百年の歴史は潮の干満動静によつての興亡盛衰史であるように思えてならない。すなわちわが国は四面海に囲まれている海洋国であるので、近代史の萌芽は「船」に始まっているといつてもよいだろう。ペリーの率いるたった4隻の黒船の渡来からミズーリ号での敗戦の調印式、はてはまた、この間の佐世保寄港事件を醸し出した空母エンタープライズに至るまでの歴史的プロセスをみると、明治百年は「開国」から「亡国」への悲劇にも似た記録史であるといえる。太平洋の波濤は鎖国の防波堤をのりこえて近代日本を形成するために、大きなうねりとなつて300年もつづいた徳川幕府の堅牢無比の祖法を押し流してしまつたことは、誰もが知っていることである。「鎖国政策」から「開国政策」へと転化移行したことにより、新生日本が誕生したのは日本自身の夜明けであつたとともに、アジアの解放、アジアの復興への決定的第一歩となつたのである。明治百年を偲ぶには、その意味からいってまず開の精神の意義を正しく理解せねばならないであろう。明治維新はすくなくとも徳川幕藩政治を倒して天皇の親政に復帰せんとする王政復古の皇政思想と、欧米諸国に対立して世界に雄飛せんとする開国進取の思想とが中核となつていたことは確かなことであり、これは同時に当時の日本民族の国家思想でもありえた。「ザンギリ頭を叩いてみたら文明開化の音がする」は開の思想を端的に表

現したものであり、また明治の人々の世界観でもあったかも知れない。この思想は時代の進むにつれて欧米模倣思想へと走っていき、やがて悪弊となった。「よきをとり、あしきをすてて、外国におとらぬ国となすもよしがな」（明治天皇御製）とあるが、いまさらながら、身にこたえてならない。ジェイムズ・カーカップが「扇を捨てた日本」において、「日本人は模倣者ではなく、同化する人間であり、同化の点ではすこぶる優秀である。彼らは他の国の理念の最上のものを同化し、それを自分の目的にかなうように適応させるすべを心得ている。日本人は、同化する民族として出発して、最後にある完全に新しいものの創造者となるが、この完全に新しいものは今度は西洋によっては同化されずに単に模倣されるのみである」といっているが、含味すべき言葉である。いずれにせよ、徳川幕府と封建制度とが打破され、王政復古と国家統一とが明治維新の名のもとに実現したことは、明らかに、開の精神に負うべきところがあった。だが明治維新の国家倫理をその特質からみれば、新たな課題を生ぜしめるものがあるので、ついでに記しておこう。藤原教授が指摘しているように、「徳川幕府政治の伝統的支配 (traditionale herrschaft) は、それが本来の伝統——祖法——を固持しえない現実、欧米帝国主義の圧迫の前にひざまずいたとき正にこの伝統に対する革新者としてのカリズマ的支配 (charismatische Herrschaft) に道を譲らねばならなかった⁴⁾」とも言えるし、「かくて多くの政治的社会的勢力が新たなるカリズマ体现者の出現を待望しながら、伝統主義の根源としての幕府政治打倒の一点に集中され、王政復古は実現をみた⁵⁾」のであった。それゆえに、新たなる支配者、換言すれば天皇は何よりもまずその非日常的な神聖性を民衆に向けて証明しなければならなくなったのである。「天に二日なく地に二王なし」の東洋的統一観の考え方から滲み出てくる天皇への思想的ヘゲモニーは、儒教的イデオロギーと神道的「天皇神権説」の谷間にあって、余りにもユニークな意味をもっている。ここでは省くこととしたい。ともあれ、ミカド朝廷の名目的主

松井喜代司

権と徳川幕府の実質的主権とが対立しているような変則的の二元政体は、時勢からはみだされ、尊王攘夷の雄叫びは日を追うて強化し、「一君のもとに万民が平等に協力するという一種の連帯的デモクラシーともいべき」⁶⁾一大運動が展開されたことは、けだし当然の帰結であったかも知れない。その意味からいえば、幕末危機打開の決定的要素となったものは何であったかを知らねばなるまい。これらについては、いろいろの議論があって、一々説明するわけにはいかぬとしても、一般的風潮のなかで、とりわけわが国史を研究し、わが国体を認識し、わが皇室の尊厳を主張し、ついにして尊王攘夷の思想を培養し、勤皇倒幕の理論を激成して明治維新の原動力となった儒学諸家の政治思想を忘却することはできない。古学派諸家のなかにおいても「弁道」の荻生徂徠のごとき反幕イデオロギーをいだいていたことも、この際付加しておこう。

もともと徳川時代の諸学者の政治思想は、ただ支那儒学の政治思想——それは常に孔孟の政治思想——を祖述しただけのものであって、これより一步も外に出ずるものではなかった。しこうして儒学の全盛を誇った江戸時代中期までの論争をみても、宗学者すなわち朱子学派とこれに対する古学派との争いは、主として、四書五経に関する解釈上の理論的食い違いだけであって、それらが多くみられるだけである。甚だしきに至っては支那礼讃主義儒家も入り混って、わが国に関する正しい認識を欠いているものさえ見出される。しかしながら藤原惺窩、中江藤樹、熊沢蕃山、貝原益軒、荻生徂徠、室鳩巢、太宰春臺、松平樂翁、佐藤一斉等の著名学者がそれぞれの学派を樹立して、政治思想に関する議論を述べていることは目を見張らせるものがある。その後、生れてきた儒学諸家のなかに日本学諸派の興隆のために学問教育の普及につとめた多くの人々を看過するわけにはいかない。日本学の諸派についてはいろいろの説があるとしても、これらは明治維新の原動力となった基礎学として特筆されるべきものがある。

(1) 水戸光圀(1628~1700)の水戸学、(2) 山崎闇齋(1618~1682)の崎

門学，(3)山鹿素行(1622～1685)の山鹿学及び国学(下河辺長流，僧契沖，荷田春満)はその代表的なものであって，それぞれの学統は根強い伝統があり，独自の立場から学風を掲げて衆望を担うに十分なものがあつた。また豊富な人材も群がっており，いい意味での競争をし，影響感化しあうところもあつた。そのなかにおいて最も主要な存在は山鹿素行，山懸大武，頼山陽，佐久間象山，藤田東湖，吉田松陰であるといつてよい。これらの人々をつぶさにわたって論究することは，枚挙にいとまがないので省略するとしても，山鹿素行——大石良雄——吉田松陰——乃木希典というようにつながる道統に対して，筆者は常日頃より敬服，憧憬しているので，専ら山鹿学に視点を向け，その政治思想の骨子になるものを論じていくことにしたい。

(3)

山鹿素行は高興といい，会津に生れた。江戸に出て林羅山に儒学を学びながら，小幡景憲，北条氏長につかえて兵学をも学び，神道，歌学，仏法などの学域にも通じた篤学の士であつた。幕府の主流学問である朱子学にもものたりなさを感じ，古学を唱道するに至り寛文6年に「聖教要録」を公刊した。このことから幕府の忌諱にふれ，その身は播州赤穂に送検された。大石良雄の有名な山鹿護送はこの時のことである。播州に謫居すること十有余年，人間性に円熟味を増し，学問も益々醇熟し，「中朝事実」をはじめとし「武教小学」，「士道」，「配所残筆」などを著わし，後世大いに献策するところがあつた。「中朝事実」にもられている内容そのものは，天皇を中心とする一貫性の思想であつて，その中正純粹性を本質とするわが国の在り方が明白に正されており，卓越している国家観や国体観は最も格調の高い著書として評価されている。素行の「中国章」をみると「皇祖高皇産霊神遂ニ皇孫天津彦火瓊瓊杵尊ヲ立テテ葦原ノ中国ノ主ト為サント欲ス。謹ンデ按ズルニ，是レ本朝ヲ以テ中国ト為スノ謂ナリ，是ヨリ先

松井喜代司

キ天照大神天上ニ在シテ曰ヒタマハク、葦原ノ中国ニ保食神（ウケモツノカミ）アリト聞クト、然ラバ則チ、中国ノ称ハ往古ヨリ既ニコレ有ルナリ、凡ソ人物ノ生成ハ一日モ未ダ曾テ水土ニ襲ラズンバアラズ、故ニ平易ノ土ニ生成スル者ハ、平易ノ氣ヲ稟ケテ性情自ラ平易ナリ、險難ノ土ニ生成スル者ハ險難ノ氣ヲ稟ケテ性情危険ニ堪フ、豈唯ダ人ノミナランヤ、鳥獸草木モ亦タ然リ、是レ五方ノ民皆性アリテ其ノ俗ヲ異ニスル所以ナリ、蓋シ中ニ天ノ中アリ、地ノ中アリ、水土人物ノ中アリ、時宜ノ中アリ、故ニ外朝ニハ土ノ中ニ服クノ説アリ、迦羅ニ天地ノ中ナリノ言アリ、南人モ亦天ノ中ヲ得ルト曰フ、愚按ズルニ、天地ノ運ル所、四時ノ交ル所、其ノ中ヲ得ル時ハ則チ風雨寒暑ノ會偏ナラズ、故ニ水土沃ニシテ人物精シ、是レ則チ中国ト稱ス可シ、萬邦ノ衆キ唯リ本朝及ビ外朝其ノ中ヲ得テ、而シテ本朝ノ神代既ニ天御中主神イマセリ、二神、国ノ中ノ柱ヲ建テ給フ時ハ、即チ本朝ノ中国タルヤ天地自然ノ勢ナリ、神々相生ジ、聖皇連綿トシテ文武事実ノ精秀実ニ以テ相応ズ、是レ豈誣ヒテ之ヲ稱センヤ」とあるのは、
「わが国は古来より中国の稱があつて風雨寒暑が一方に偏しておらず、常に四季の區別がハッキリとしており、土地もよく肥饒しており、秀でた人物も神代の御代から相継いで輩出し、かつ、皇統は連綿としてつづいており、これは誣妄の言でない⁷⁾」と述べているのである。これは素行の偽りのない気持ちを吐露したものであつて、反幕イデオロギーへの端緒ともなっている。しかし、「中朝事実」における尊王思想を追究していくうちに、素行と雖も儒教論理の範疇からぬけ出ることができなかつたのをしばしば発見する。それにもかかわらず、素行は儒教的天命説に鋭い批判を浴びせて、幕府正統派のイデオロギーに対抗して異端説を唱え——これは崎門学派、水戸学派も多分にそうであるが——往古の精神を熱心によび醒まそうとしているのが窺える。すなわち「復古精神」である。「夫レ天下ノ本ハ国家ニ在リ、民ノ本ハ君ニ在リ、君明ナル時ハ則チ民安シ、民安キ時ハ則チ国治マリ、家整フ、国家治整ナレバ則チ天下平ナリ」は一方におい

て儒学の思想的表現を露呈したものであろうが、しかし、他方にあっては
 一君万民の復古精神——それはわが国本来の思想（祭祀を重んずる）——
 を如実に表顕しているものとして解釈することができる。ともあれ、儒教
 理念の根本をなすものには天命有徳に帰依するという徳治主義の理想、そ
 れは王道精神を内包するものであるが、この徳治主義の理想がいわゆる天
 皇的王朝政治において最も典型的なモデルとなって君臨実現されんことを
 素行は願っていたに相違ない。だから名分論からいえば、天皇はたしかに
 この国の正統の君主であり、幕府はただ単なる覇者に過ぎないということ
 になるのである。素行の「中朝事実」は、つまるところ、孔孟のいう「政
 は正なり」と「政は誠なり」とを同一意義に解し、「修己治人」をもって
 教化主義に当らしめるという独特の見識をもちながら、史実と理想のアナ
 ロギーの優越性に基盤をおいて、日本こそ中華であり、王道的理想国家で
 あると主張し、たとえ、儒教的イデオロギーから脱皮できずとも、天皇親
 政への絶対的権威を樹立せしめんとしたのであった。このことに対して異
 論を唱える者はおそらくいないであろう。「……治国平天下ノ要ハ、身ヲ
 修メ以テ政教ヲ正フスルニ出ツ、二者相持シテ而シテ後ニ功化ノ実ヲ談ズ
 ベシ、中華往古ノ聖主政教ノ功、舊紀ニ著ハルル所乏シカラズ、後世之ヲ
 襲ヒ之ニ律トリ、以テ祖述憲章セバ、乃チ無為過化ノ治千万世其ノ沢ヲ
 蒙ル可キナリ」は君主の徳行、政教法令の上からいっても政治を行うに最
 も理想とすべきことを説いた素行のすぐれた見解であり、これは長州の
 吉田松陰に受け継がれていった。松陰は素行の学統の師範家を嗣いだ山鹿
 学のエリートであったことは周知の如くであり、また、維新の文中子でも
 あり得たことを強調しておこう。

(4)

吉田松陰は天保元年（1830）長州萩の松本村に生れ、幼名を虎之助、諱
 は矩方、字は義卿、通称を寅次郎といった。彼については無数の研究者が

いて、ありとあらゆる面で討究しつくされているので、ここでは要諦のみを論ずることにはしたい。儒学及び国史に通じ、山鹿流兵学を修めたはずの松陰は、長ずるに従って儒教に対し疑惑をもつと同時に、お家の学問である山鹿学にも一種の疑問をもちはじめ、ついに新たなる着目のもとに時勢に投合した最も適切正当な政治思想を生ぜしめたことは卓見であった。このことに関しての学説は粉々としているが、松陰の政治思想を要約すれば、儒教的であっても、よくわが国本来の思想に復帰し、かつ、時勢を矯正する経世済民の活学でもありえたといつてよい。松陰の偉さはここにおいて遺憾なく発揮され、尋常一様の儒学者でなかったことを立証するに充分なるものがあつた。松陰の時勢に適合した最も適切正当な政治思想のなかにかくされているものは何であつたらう。それは、尊王の思想であつたといつても決して過言ではなく、万丈の気を吐いた青年、松陰が浮き彫りにされているようである。いまさら、筆者が松陰の「士規七則」を云々することはせずとも、そのなかに盛られている国体論から生じてくる尊王思想は、反幕精神一途に徹していることが理解される。「かくすれば、かくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」のやまと魂は、「新しい時代をつくり出していくんだ」という気概であつたらうし、また祈りの魂であり、志すところのすべてのものであつたに相違ない。また、この精神は松陰自らが苛酷な運命を知りながら喜んで選んでいったところに真価が見出されるのであつて、この魂はいつしか勤皇を志す人々に承継されていったのをわれわれは知っている。松陰の「幽室文稿中読七則」の題下に記されている以下の文章をみると「朝廷上ニ尊ク、幕府下ニ恭シト、果シテ言フ所ノ如ケレバ則チ今又何ヲカ憂ヘン、唯夫レ然ラズ、志士悲憤スル所以ナリ、足下亦タ嘗テ禁闕ヲ拜シ、而シテ江城ヲ観ズヤ、其ノ尊ハ則チ然リ、其ノ恭ハ安ニカ在ル、夫レ六百年ノ変皆臣子ノ道フニ忍ビザル所、武臣府ヲ開クハ頼朝ニ勅マル、陪臣命ヲ執ルハ義時ニ始マル、逆臣国ヲ奪フハ尊氏ニ起ル、三臣ノ功其ノ罪ヲ償フニ足ラズ、平右府、豊臣閔白、

源大相国ニ至リ，其ノ忠ハ固ヨリ尊王敵愾ニ在リ，然レドモ其ノ臣下識慮深カラズ，克ク其ノ志ヲ成ス莫ク，因循今日ニ至リ，依然トシテ頼朝，義時，尊氏ノ舊ナリ，況ンヤ上洛ノ典久シク闕ケ，奉勅ノ教漸ク疎ク，其ノ他ノ千万，目有ル者皆觀，耳有ル者皆聞ク，足下蓋シ嘗テ之ヲ聞キ而シテ觀ル矣，其ノ尊ハ則チ然リ，其ノ恭ハ安ニ在ルヤ」……と述べているように，幕府に対しての憎悪感はその極に達しており，反面，燃ゆるが如き尊王の思想が描出されている。またこの文章は，当時，幕府が朝廷に対して外尊内庄主義をとった処置に対しての攻撃文ともうけとれる。こうしてみれば，「激派尊攘論を最も早く思想的に代表し，かつ実践をしたのが松陰¹⁰⁾であったことがよくわかる。高杉晋作，久坂玄瑞，桂小五郎，吉田稔磨，前原一誠，井上聞多，山縣小助，伊藤俊輔，品川弥二郎の面々がすすんで松下村塾に学び，松陰を師表として尊敬したことは何かそこに目にみえない通う血胤があったことであろう。幕末から明治の時代を建設した一大革新運動家を松陰とするならば，唐の時代を建設したといわれる文中子「王通」と相並んでも決して恥ずかしくない志士であるといえよう。⁽¹¹⁾筆者は次に僅か八畳の部屋（翌年，十畳半に増築したのが，現在，山口県萩市の松陰神社に現存している）のせまい学び舎，松下村塾で俊才教育をした教師としての松陰が，いかにすぐれたものをもっていたか，また，この英才たちが何故に松陰の思想にアプローチしていったかを問題提起してみたい。また当時における青年層の相を眺望してみることにする。

(5)

前述したように，農本的文教政策によって封建的国内統一の政治的形態を営んでいた徳川幕府は，漸次自己の家門名誉を守護するための防衛対策として，外に鎖国政策を演じながら，内において儒教的教政主義による文教思想を樹立したのだが，時の趨勢に対しては何等なす術がなくなった。このことは別に幕府の貿易政策をみても明白の理である。やがて，尊王討

幕の思想が澎湃として起り、実践的運動が開始されたのであるが、ここで注意しなければならないのは、この動乱期においての^{人々のものを考える機能の有無である。}この有無深淺の度合をよく省察してみると、人々のものの考え方そのものは国家非常時という接点において、同一義的な見解をもっていたことには変りがなかったにしても、オールド・ゼネレーション対ヤンガー・ゼネレーションにあっては、一層対立の深度が深まっております、かなりのへだたりがあったことは否めない。殊に幕末社会のソーシャル・テンションは日本人同志の張りつめた関係、国際情勢の緊迫関係におかれていたのであるから、これを無視するわけにはいかない。ともあれ、テンション（緊張）とコンフリクト（闘争）の混合のなかで朝廷と幕府、攘夷と開国、尊王と佐幕というように、圧迫、排斥、恐怖、偏見、制裁等々の感情の渦中であって、のるか、そるかの土壇場にたたされていたのであるから、ヤンガー・ゼネレーション達のいなく青春期の心は松陰の喘ぎ求めたフレイヘッド（自由）におそらく魅力を感じたであろうし、また共鳴したに相違なかった。かくして、松陰によって培われたヤンガー・ゼネレーション達のいなく火の玉のような尊王思想は倒幕運動へと駒を進め、多くのオールド・ゼネレーション達のもっていた徳川封建的固守思想を粉砕してしまったのである。若さは非常時体制下であって冒険をほしいままにする可能性をもっている。これあるがために「歴史は青年によってつくられる」所以がある。天皇を中心としての民族主義的政治革命への大きなビジョンを実現させるために、歴史的使命観を多くの英才達に説得した松陰の気魄は、その感化力において大いに意義があり、いまなお、再研究されるべき価値があろう。もとより、明治維新の偉業をなしたとげた志士は、松陰の薫陶をうけた者ばかりではないにしても、直接幕府打倒の狼煙をあげた西南雄藩の連合軍を忘れることはできない。それらの推進者として列挙される西郷、大久保、木戸（これを通常、維新の三傑と知っている）、また維新の誕生を見ずに世を去っていった高杉にせよ、坂本にして

も、みな少壮の藩士であり青雲の志を抱いたエリート達でもあった。だが彼等のような素晴らしい幕末のヤンガー・ゼネレーションを代表するに足る英才さえ、終局においては、「封建主義に対する政治的対立者」であったに過ぎなく、やがてやってくる新社会が如何なる宿命を担わされるか、知る由もなく、ただがむしゃらに躍進していっただけのことであった。新しい時代がやってくるんだという一種の反動的政治エネルギーを思う存分発散せしめて、王政復古をなしとげて一大成功をおさめたのであるが、何か日本の将来に割り切れない思想的課題を残していったような気がしてならない。さて、このように説いてくると、倒幕運動をおこした尊王派のヤンガー・ゼネレーション達と同様に幕臣派のヤンガー・ゼネレーション達にも目をそそいでみる必要があるので、少しく余談に移ることを許されたい。たしかに幕末社会のソーシャル・テンションにあつてのヤンガー・ゼネレーション達はオールド・ゼネレーション達よりもはるかに心理的にみて、不安、恐怖、憎悪、敵意の感情が胸中に宿っておったであろうし、「張りつめた」人間関係においては、尊王派よりも幕臣側の方が見方によってはかなり深刻なものがあつたであろう。むしろ尊王派のヤンガー・ゼネレーションの「緊迫」関係は王政復古という大目標によってテンションの解消ができるという明るい見通しがあつたが、しかし幕臣側のヤンガー・ゼネレーション達は目的を失いながらも、節を徳川に捧げ、最後まで尽さんとする「張りつめた」人間関係のなかで、終局においては、朝敵という汚名をきせられ、時勢に反逆し若い青春を無残に散らしてしまつたことは痛ましい限りと言わざるをえまい。世俗的には、これらの人達を馬鹿々々しい生き方であると思つているに違いないが、「深く考える者にとっては倫理は生命よりも尊い」ことを十分に知らされる。松陰の「死友に負物、安ぞ男子と称するに足んや」（照顔録）の言葉を思い出さずにはおられない。また、この問題は別箇の観点からみれば、すくなくともヤンガー・ゼネレーション達のものを考える機能性如何にかかってくるのであ

松井喜代司

る。いずれが好し，悪しであるかは論じられないにしても，青春期の世代に対してある一種の示唆を与える。このことを付け加えておく。

(6)

「政治刷新」(昭和43年2月25日発行)の見出しに「明治に学ぶべし」と題して以下の如きことが主張欄に記されている。「歴史は繰り返すというが，維新前後の内外の情勢と今日のそれとの間には極めて共通，類似した点が少くない。……(中略)……維新に先行して，その精神的基盤として国学の復興があったことである。徳川幕府文治政策の御用学であった朱子学は，国学復興の著しい影響を受け，王道を尊び覇道を蔑しむ思想は尊王討幕に，堯舜の治の理想は天皇親政に，修身齐家治国平天下の思想は一君万民に，浩然の気は天地正気の気に変形され，国学儒学の融合により，新たに日本学とも称すべき思想の確立が行われていたのである」と。筆者はこの説き方に対して同感の意を表すとしても，幕末から明治にかけての論説は多岐であるので，主として山鹿素行——吉田松陰の思想に対しての論究を試みたのであるが，もとより，水戸学や崎門学も明治維新にあずかって力があつたことはあらためて言及するまでもない。またこれらの学派は日本近代化の成功をなすとげた思想史の背景であるといつても決して過言でないのである。いずれにしても山鹿学，崎門学，水戸学は尊王学であり，勤皇思想の権化でもありえたのである。さて，このように述べてくるとどうしても山県大弑，頼山陽，佐久間象山及び藤田東湖についても，簡単ではあるが，それぞれのパーソナリティと学説の一端を述べざるをえなくなった。余白の紙枚も余り残されていないので，結論を急ぐことにしたい。

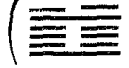
山県大弑は甲斐の人，享保10年(1725)に生れ，幼名を三之助，諱は昌貞，柳荘と号し，大弑は通称である。宝暦初年，江戸に志を求め自ら塾を開き講学，大いに努むるところがあつた。¹²⁾大弑の政治思想は一口にい

って「柳子新論」に表現されている。儒学の「礼楽」を重んじ、これを政治の最終目的とし、天皇政治を憧憬している。「士ニシテ忠ナル者吾其ノ必ズ有ル無キヲ知ル」といい、幕府の存在を痛撃したために、明和4年（1767）ついに死罪に処せられた。次に、頼山陽についてであるが、彼もまた明治維新の上に大きな思想的、精神的な貢献を残しているのである。安芸の人、安永9年（1780）に生れ、名を襄と叫んだ。山陽は寛政の三奇人といわれた高山彦九郎とも親交があり、主として国史の編纂に志を向け、江戸に遊学したのである。彼の「母を奉じて吉野に遊ぶ」の詩をみれば、如何に親孝行者であったかを理解することができる。「輿に侍し阪を下れば歩遅々たり、鶯語花香別離を帯ぶ、母は已に七旬、児は半白、此の山重ねて到るは定めて何れの時ぞ」と詠じた山陽は、おそらくこの時が一番楽しかったのではあるまいか。寛政12年、京都に出奔狂疾の名目を以て、家に監禁されたが、幽居中に彼の有名な「日本外史」22巻を著わしたのである。それでは山陽の政治思想の根本は何んであったろうか。それは、支那儒学の政治思想を継承祖述したものであるとあってよい。その本質は徳治思想であって、「日本外史」乃至「日本政記」に論じられており、これらはわが国史上の名著ばかりでなく、正に一世を睥睨しているといってもよい。「日本外史」はわが国の歴史哲学であり、その中核をなしているものは尊王思想である。源平二氏から徳川氏に至る武家700年の歴史を綴ったものであり、文章は雄健で、烈々たる勤皇の精神をもって一貫していることは改めて言うまでもない。佐久間象山の政治思想についてであるが、彼は今までの儒学者と若干異っている。象山は修理と称し、信濃の松代藩主、真田家に仕えた学者である。彼は儒学を修めながら、蘭学をも極め、知識を世界に求めんとした当時における唯一の進歩学者であった。象山の残した著書や意見書などを緒いてみると、その政治思想は「省讐録」のなかにおいて、ホンのわずかなものしか述べていないが、しかし、これは当時の考え方としては実に卓越したものをもっていたといわざるを

松井喜代司

えない。すなわち、「省響録」では民本主義の思想を強調するとともに、政治は力が必要であることを説いているのである。「仁義」とか「礼智」の道徳を順々に説いている学は最早無用であるとし、専ら科学的な見解をもって当時のわが国における国防力に対しての必要性を説いていることは、象山ならでの識見である。幕末期における象山は「東洋の道徳、西洋の芸」(芸とは科学の意)¹³⁾を唱え、熊本藩の開国論者横井小楠と共に「東西の二大眼球」と称されるほどの学者であり、特筆されるべきものがある。中国地方の果て、長州の萩に生れた松陰が、青海島に打ち寄せられる波に時代の動きを聞いて、日本をつつむ世界の動きに関心をもちはじめ、長崎にいて少しでもヨーロッパに近い風にあたろうとしたことは無理からぬことであつたらう。松陰が脱藩して江戸に赴き、佐久間象山の門に入って洋学研究に専心したのはただ運命という言葉だけでは片づけられない何ものかがある。このために、松陰は今まで学んだ自己の学問に対して疑問をもち、そこから発奮して独自の思想をつくりあげたのであつた。このことに関しては前述の如くであるが、松陰は象山の学殖と達識には心より敬服心酔していたのである。次いで、藤田東湖に着目してみると。水戸の藩士東湖は幽谷の子として、文化3年(1806)に生れ、名は彪、水戸の烈公齊昭に仕え、主として攘夷の実現に努力した。東湖の政治思想も儒学の徳治思想より脱皮できなかつたが、それでもわが国政治の根本を「尊神尚武」に求め、そこから政教一致観、文武一体観、民本主義観を説いているのは矢張り水戸学の真随であらう。従って、東湖の著書は広く尊攘派の経典として重要視され、多くの志士達にも愛読されたが、惜しむらくは維新の大偉業を見ずして江戸安政の大地震で圧死してしまったことは残念である。以上、明治維新の原動力となった尊王諸家の政治思想を寸論したが、それらの人々によって階級制の打破、人材開発、適材適所論も唱えられたことをもついでに記しておこう。

(7)

「宮さん、宮さん、お馬の前に、ひらひらするのはなんじゃいな、あれは朝敵、征伐せよとの錦の御旗じゃ、しらないか、トコトンヤレ、トンヤレナ」の歌を聞いていると明治時代の息吹きが感ぜられ、同時に明治は遠くなったという印象が脳裡をかすめていく。長州藩士の品川弥二郎らが官軍兵士の気分を盛りたためるために作ったという都風流「トコトンヤレぶし」のこの歌の文句のように明治天皇の踐祚、つづいて徳川幕府討伐の錦旗はついに江戸城明け渡しとなり、新時代をきり開いていったのであるが、江戸の末葉よりすでに渡来していた欧米の近代的政治思想が用意されていたのを人々は知っていたのであろうか。「開国と同時に潮の如く殺倒した欧米の法治主義の政治思想はにわかに沸騰したのである。「自由論」、「民権論」などが出現したことにより、わが国特有の政治はいつしか姿を没し、学者や政治家達はみなこの説に附和雷同し、世のなかが一変してしまった。かくして、時代思想の大勢に抗するをえず、民主政治思想によって政党政治の実現をみるに至ったのである。こうしてみると、幕末から明治の世に移る転換期は波瀾に明け暮れたとあってよく、易でいう「水雷屯」

の卦に当たるものと判断する。この卦は乾坤、つまり天地の卦であって天地が始めて開けたところでこの震の卦が始まるという謂である。「屯」とはじゅんという音とちゅんという音と両方あって「チュム」とも読む場合もある。この「水雷屯」の卦を世のなかにとってみると、いまだ世のなかを治め始めてゆくことを意味する震の卦が、進むことが出来ずに大変困難な状態にある。つまりこの卦はどんなおそろしい世のなかにあっても、つき進んでいかなければならない卦であるのに、出でて往かんとすれば眼の前に大いなる水（幾多の艱難事を意味する）があって險難の象を示しているから、ときによって腕力を用いても通っていかなければならないこととなる。往かんとしても往かれない、しかし往かねばならない

松井喜代司

震の卦は、その方便として、世のなかを平和に治める「侯」を建てなければ治まらないことになる。この「侯」は元亨利貞の四徳を有する者でなければいけない。天皇はこの意味からいって「侯」に該当することになるから、勤皇の志士が「錦旗」の下に集合団結して、このむずかしい難局をのりこえることができたと判断してもよいことになる。いま、易経を引用して幕末から明治の世を占って見たが、ともあれこの時代は日本史のなかでも大トピックであったに違いない。

アメリカの鉄道王ハリマン2世が「2年経ったら再検討せよ、5年経ったら疑え、10年経ったら捨ててしまえ」と名言を残しているが、たしかに科学技術の発達の自覚ましい近代文明社会にあって、いつまでも過去のものに恋々としてこだわっていることは意味ないことであって、或る時期がきたら思いきって再研究するなり、再検討するなり、疑問を抱くなり、改革するなりすべきことは重要なことである。だが「10年経ったら捨ててしまえ」どころか、百年経っても捨て去ることができない歴史の足跡を残している「明治維新」は日本史上でも不滅な光を放つものであるから、この明治百年と銘をうつ今年を契機に、「日本人自らが我が国をよく知るよう努力し、その国民的エネルギーを今後を発揚する」ことを願わなければならないことになる。この言葉は佐藤総理の明治百年記念準備会議の開会挨拶であるが、武道館に掲げられた幟の文字がヤケに頭のなかに残っているので記しておこう。それは「昭和にも生かせ、維新の国づくり」という言葉であるが、会場での雰囲気には決して明治の御代への懐古趣味というものはおよそ感ぜられなかったし、また「明治維新」の栄光を夢みるものであるとも思えなかった。ただ、「明治維新」というものを現下の学生諸君や、一般のヤンガー・ゼネレーション達がどのような形で受けとめているか、それと同時に「愛国心」というものをどのように感じとっているか、ということとその場にあって真剣に考えさせられた。現実の問題である「学園騒動」をみるにつけ、日本の前途がどうなるかと思わざる人はい

ないであろう。最後に、筆者は、明治の真精神をよく体得して、現時の墮落している日本政治社会を救済蘇生してくれる「昭和の俊傑」の出現を祈念し、自らも日本人の根性というものを、今一度、再考究することを約して、筆を措くことにする。

参 考 文 献

1 資 料

- 注1) 明治百年記念「竜馬がいく展」……………1. 土佐藩の藩風・竜馬のおいたち
2. 維新への胎動（倒幕運動の起り・土佐勤王党・天誅組） 3. 日本の夜明け
（江戸幕府崩壊・明治維新）
注2) 幕末の群像展……………1. 黒船来航 2. 国防 3. 安政の大獄 4. 桜田門外の変
5. 外人殺傷事件 6. 禁門の変 7. 外国船砲撃事件 8. 第二次長州征伐 9. 薩
長同盟・薩長芸三藩盟約 10. 大政奉還 11. 遣米使節 12. 浪士組上京
13. 八月一八日の政変 14. 生野の変 15. 天狗党の乱 16. 官軍登場

2 著 作

- 注3) 吉原政巳著「明治維新百年」……………「流れ」（第15巻第5号16頁）
注4) 藤原弘達著「近代日本政治における国家倫理の特質と神権説との関連」
……………政経論叢第19巻第4号（明治大学政治経済研究所発行）p. 33
注5) 同
注6) 神川彦松著「ペリーの遠征と近代日本の形成」……………明治大学政経学部50
周年記念論文集 p. 79
注7) 佐藤清勝著「大日本政治思想史」……………p. 210～p. 210
注8) 同
注9) 同p. 249
注10) 丸山真男著「日本政治思想史研究」……………p. 354
注11) 拙著「文中子の政治思想」……………政経論叢第21巻5・6号
注12) 明治維新百人一首（和歌・漢詩集より）
注13) 小磯実翁著「吟と友」……………5月号p. 20

3 其 の 他

外務省蔵版「幕末外交史料」集成（巻1～3）大日本古文書・人名辞典・政治
刷新新聞